



# 大きくなった子どもとつきあう

津守 真

子どものときと大人になってからは関係がないという前提に立って、子どもから大人への成長を考えはじめたい。

人はだれでも過去の自分のままで現在を生きるのではない。過去の自分のやり方を意識して変えて、現在は新たに生きようとしている。大きくなった子どもと再び出会い、交わることになった場合、以前のことを念頭において付き合うのではない。きょう新たに出会い、小さな表現に目をとめて交わり、いま一緒に快く過ごすことをつとめる。

月に一日のつきあい

私はこの頃、愛育養護学校の子どもとつきあうのは、月に一度である。長年、私が毎日つきあってきた子どもたちなので、最初の頃は、私が行くと子どもたちがわらわらと寄ってきた。この頃はそれほどではない。毎日頼りにしている先生たちにいろいろと頼んでいる。私は客人である。わずか一年の間でも、毎日頼りにできる人とそうでない人との間にはこういう違いが生じる。客人にはそれなりのメリットもある。少し離れた立場から子どもを見られるので、子どもの変化にすぐに気付く。

U子は、私を見ると、「うえしたいく」と言う。この子は私に抱かれて階段を上るのを「うえした」といったのだが、ぐんと大きくなった子どもを私はもはや抱くことができない。そういう自分を意識しながら、私は「手をつないでいこう」と言うと、「おててつないで」の歌をうたいながら自分の足で階段を上り、二階の廊下を歩いて行く。「しずかねー」と小声で言い（これは以前からの継続の、私とU子との間のひそやかなやりとりである）、一緒に「里の秋」をうたう。二階の部屋で何かをしている間に、U子はひとりで部屋を出て行き、歩いて階段を降りる。足を交互に出して降り、最下段は両足で跳んで降りる。足が弱くて歩かなかった子どもである。私が会わ



なかった日々、保育者にはいろいろと苦心があったと思うが、細かいことは分からない。わずかの間にも私には分からないことが一杯起こっている。しかし、私が何年も一緒にこの子と過ごしてきた日々が、これでよかったのだと確信できる。

### 青年期に至った人たち

Y先生の造形教室には、愛育養護学校を十年ほど前に卒業して、地域の養護学校の高等部を終え、福祉作業所に通っている青年たちが月に一度集まる。愛育養護学校で美術を担当しているY先生の教室では、子どもと同じように、それぞれが思うように描いたり作ったりしている。若い芸術家たちが、先生というのではなしに、一緒に作るのを楽しんでいる。私はこの数年とくに忙しくて、殆ど参加したことがなかったのだが、先日久しぶりに寄せてもらって面白かった。私がいだからといって、特にどうということはない。青年期にあたるこの人たちは老人よりも、若い人を相手にするほうがはるかに楽しい。かつて親しかった大人との信頼関係は心の底に継続している、それぞれに自分の道を切り開いて青年期に至った子どもたちは、同世代の仲間との交わりを求めている。

J夫は、この日、青や黄の色透明紙に人の絵をかいていた。手を描くスペースがな



くなり、もう一枚紙を足してもらった。こうして四枚の紙をつぎつぎに継ぎ足すこと  
によって、描いた手足が伸びた。J夫はこれまで顔だけしか描かないことが多く、手  
足をひろげて描いたのはじめてだった。そして周囲に絵の具で四角く枠を描いた。  
以前は枠を最初に描き、それにすれすれに何かを描いていた。J夫にとっては枠が存  
在の基準となっていたのだと思う。この日は、枠にすれすれに描くというよりも、手  
足を伸ばした人間をまず描いて、それを枠にいれたのである。J夫の内面にも変化が  
あったのだらう（幼児の教育九十五巻七号一九九六年参照）。

J夫は、造形教室に来るとまず着替えて丁寧に洋服を畳み、それからうがいをし、  
台所で冷蔵庫をあけ、テレビをつけて造形教室開始時間の二時を待つ。母親に電話を  
かける。ここまではいつも同じであり、これが狂うことは承知できない。日常生活の  
手順が定まっているというのも小さいときと同じである。だからといって他のことも  
同様にきまった順序にせねばならないと考えたら間違いである。芸術は、人の心から  
出る小さな動きを創造性と認め、自らの意志でそれを実現できる環境から生まれる。

J夫は、おやつするとき、みかんを食べた。あとで気がついたのだが、むいたみかん  
の皮が五片に裂けており、その一片に種が集められて並んでいて、五片の中央が臍の  
ように切り抜いてある。見事に手をひろげた人の形である。いまJ夫の心には人間が



大きな位置を占めているのだろう。

N男は、造形教室にきている中学生の女の子の髪をさわって、キーと大声をあげ、他の子にうるさいと言われていた。この子が小さいときの記録には、学校に来る途中、広尾のバス停でキーと大声をあげて母親が困ったと記してある。大声をあげるという点は同じである。今日のN男の大声は、N男がはじめてこの中学生の女の子の女性としての成長に気付いたことに対する反応だろう。造形教室に迎えにきた母親にこのことを言うと、あのときは自分が未熟だったからといった。あのときにもN男はバス停でだれか素敵な女性に出会ったのかもしれない。両方の時期を知ってみると、あのときの大声にも何か意味があったのだろうと推測がつく。それを奇声と呼んだら間違える。

### 二十年を隔てた交わり

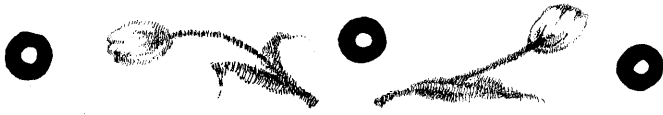
現在、私が毎週行っている御殿場コロニーで、二十年前に私が付き合ったことのあるH子さんと再び出会うことになった。彼女は最初、八人ほどの人と一緒に寮に住んでいたが、あるときから、寮の職員の髪を引張り、噛みつき、激しく頭突きをした。私が体育館で音楽の活動をするときも、私に飛びかかって激しい行動をするので、私



も身を守らなければならなかった。毎月来てくださるクリエイティブダンスの先生にも同様に激しく行動した。毎週私はH子さんと向かい合って思い切りエネルギーを出さねばならなかった。わずかの時間のことでもそうなのだから、毎日夜まで付き合っている職員はさぞかしと思いやられた。

H子さんは、四歳と五歳のときに母子愛育家庭指導グループに週二日通っていた。私はその子の激しい水遊びと付き合ったことは覚えているが、それ以上のことは明瞭な記憶になかった。コロニーで頭突きや噛みつきなどの激しかった頃、私は多忙を極めていて、二十年前の記録をひもとく時間もなかった。最近になって、記録を取り出して見た。それは丁度私が、子どもの見方を一八〇度かえて、行動を表現として見るようになった最初の頃であった。

その後二十年間私はH子さんと会うこともなかったが、小学校、中学校もしばしば転校し、どこかの施設に入ったことを聞いていた。そこでどういう生活をしたのかは、私は敢えて尋ねようとは思わない。ただ、私が出会ったときの状況は前述のようであった。私共はいろいろと考え、相談し、H子さんは大勢の人が居住する施設の生活が嫌なのだろうと考えた。そして近隣でグループホームを開いている方のホームに移り住み、昼間の活動だけコロニーに通うようにした。施設の外に住むことが分かっ



たとき、H子さんの激しい行動はほとんど全くなかった。一、二週間のことだった。ノーマリゼーションで言われているように、施設からホームに環境が変化することがこんなにもたいせつなことがよく分かった。

毎日子どもの保育をしているときには、大人と子どもとは相互に一緒に変化している。月に一度のときは、大人と子どもとは違う場で成長していて、一日だけを共有している。一年に一度出会うときは、もっとそうである。二十年たったときは、自分が知っていたその子とは違う人と付き合おうと考えた方がいいだろう。大人も二十年前とは違う境遇にある違う自分になっている。いまこの人が直面している状況、いま関心をもっている事柄を理解して応答するのだから、そこを一緒に成長する場とすることはできないだろう。